

「小論文」 国語国文学科

受験番号					
氏名					

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「歌を作る作者」という問題は、和歌史のさまざまな局面で取り上げられてきた。最初に正面から取り扱われたのは、紀貫之の手になる『古今集』の仮名序である。

古への代々の帝、春の花の朝、秋の月の夜ごとに侍ふ人々を召して、事につけつつ、歌を奉らしめ給ふ。あるは花をそふとてたよりなき所にまどひ、あるは月を思ふとてしるべき闇にたどれる心々を見給ひ、賢し愚かなりと知ろしめしけむ。

古代の天皇は、四季折々に群臣を召し、和歌を詠ませ、その折々の風物をどう表現するかで、臣下の賢さ・愚かさを判断したのだという。なぜ、和歌などで人の賢愚が判定できるというのだろうか。歌のうまさと社会的な有能さなど、むしろ対極にあるような事柄ではないのか。花や月の美しさを表現する。それはすでに個人的な感情ではない。花月に感動することそのものが、宮廷人としての資格を表すのであり、それを表現するとは、宮廷人の思いを望ましい形で代弁する行為である。だから、風物への感動の表現とは、演技されるものにほかならない。ただ感情をストレートに表せばよいというものではないのである。その場にふさわしいように、皆で共有できるように工夫する必要がある。個人的な心情を社会化すること、社会化されたものとして感情を表現することが求められる。和歌の言葉の工夫とは、自分を社会化する努力の跡であり、社会化する過程を露呈させるものなのだ。だから和歌の作り方によって、その人物の社会性が、つまり賢愚が判断できるといわけなのだろう。

月見れば千々にもものこそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど

(古今集・秋上・一九三・大江千里)

について、正岡子規は、上二句はよいが、下二句は理屈であり蛇足だ、と非難した(『歌よみに与ふる書』)。歌は感情を述べるものなのに、理屈を述べるのは歌を知らないからである、と罵倒する。「わが身一つの秋と思ふ」と述べれば理屈でなかったのに、という改善案も示している。自分だけの秋だと感じるのが実感だからということなのだろう。彼は触れていないが、「千々」と「一つ」が上句と下句に対照的に配置されているのも、漢詩の対句に倣ったもので、「理屈」に加えておくべきものだろう。しかし、「私だけのための秋だとは思えない」と自分中心に言わずに、「A」と言うからこそ、また「千々」と「一つ」を対照させるからこそ、自分勝手な思いの吐露ではありません、人々との共通の「心」を経由しています、という宣言になるのだろう。しかも、理屈に収まらない、自分だけの悲愁も表しうることになる。『古今集』仮名序に語られている「歌を作る作者」は、人が自らの心を社会化する過程を示していたのである。

(中略)

和歌は古代社会の産物である。古代社会とは貴族社会のことである。貴族が自分たちの心を表すために生み出し、完成させた詩が和歌であった。もちろん、『万葉集』を含めて。だとすれば、当然、古代社会が崩壊して、中世社会(鎌倉・室町時代)へと移行したことによって、和歌は衰亡してもおかしくなかった。担い手となる階層が力を失っていくのだから、彼らの表現手段も衰退するのが当然であつたろう。しかし、和歌は減びなかったし、縮小もしなかった。むしろ担い手となる階層を広げ、前代と比較にならぬほど大量の歌が作られた。

中世に入って和歌世界がさらに拡大した大きな要因の一つに、和歌が教育と結びつき、修業や精神修養の役割も兼ねるようになったことを挙げておきたい。文語としての日本語の精髓であり、物語など散文を含めた他の多くの文学作品、さらに演劇・美術・工芸などさまざまな文化領域ともかわりが深い和歌は、基礎的教育科目として理想的なものと見なされた。なかでも、自分で作れるところがいい。詠むことによって、その世界に参加できるからである。例えば、『源氏物語』をふまえた和歌を作ること、この大長編を読破し我が物としたと、誇らしげに示すことができる。もっとも実際には、ダイジェスト版が用いられることが多かったのだ

「小論文」 国語国文学科

受験番号					
氏名					

が。和歌を作ることによって、和歌世界のみならず「みやび」の世界に参入し参加している、という実感を得ることが可能になるのである。この和歌の参加感を、集団制作の形をとって、さらに直接的に感じ取られるものとしたのが、中世に流行した連歌である。

ともあれ、参加できる仕組みを持つことによって、和歌はすたれなかった。「作品の中の作者」はいわば理想的な人物であり、そこへ至るために、歌を作る努力を繰り返し返す。作ることが、修業であり、精神修養となる。それゆえ「歌を作る作者」は、理想へ至る過程として位置づけられるのである。こうして和歌は、社会的意義を新たに獲得しつつ、滅亡をまぬかれた。和歌が縁遠いものになったことが、逆にそれを目標にすることを可能にした。和歌への距離感が、憧れに転化したのである。

近世社会に移っても、修業・修養としての和歌の意義は、継承された。上野洋三氏の整理・分析によれば、中世の歌論を受け継いだ堂上(貴族)の歌論でも、やはり「無心」を得るための精神の鍛錬が強調され、「まこと」(信・真・実・誠)が求められた。そしてその論理は、やがて、地下(貴族以外)にも広まり、また俳論などにも継承されていった。蕉風俳論の「不易流行論」などがその一例だという。

近代社会に至ってついに和歌は滅び、近代短歌・現代短歌がそれに取って代わった、とされている。ここで、古典和歌と近現代短歌の関係を論じる余裕も能力もないのだが、ただ一つ言っておきたいのは、五句・三十一音の詩の形式をとり、しかも「それを作ることは精神修養につながる」という考え方は、近代以降にもしっかりと受け継がれていったことである。斎藤茂吉の「実相観入」などという言葉を讀むと、とくにそう感じる。これもまた、「無心」の系譜に連なるものと言えないだろうか。

和歌は、人の生き方という側面に関わることによって、時代を越えて生き延びてきた。断っておきたいのだが、私は、和歌が長い歴史を持つていることについて、それだけで素晴らしい文化だと胸を張るのは、早計に過ぎるだろうと思っている。「吾が仏尊し」、つまり自分の信奉するものだけが尊いという態度は、かえって和歌の底にあるものを覆い隠してしまう危険性がある。権威への盲従すら生みかねない。和歌は権威主義や事大主義とも、実に相性がよいのだ。しかし、理想を追い求めながら、なおかつ人々とともに現実を生きようとする営為と関わってきたこともまた、忘れたくないと思う。その営為に対して演技という名を与え、その意味についてあれこれ考えてきたつもりである。演技は、現実と虚構(理想)が重なり合うところに存在するからである。

和歌は、時代を越え、一貫して「無心」と深い関わりを持っていた。いったいどうしてだろうか。そもそも無心とは何なのだろうか。簡単には答えにくいことだが、少なくとも無心が、雑念を去った、集中した状態を指すことは間違いないだろう。優れた作品は、集中した心がなければ生み出しにくいし、先入観や下心を持つていると、なかなか良い作品にはならない。だが、そうした常識論だけではなく、「無心」にはもっと大事な要素が含まれているだろう。

それは、我を捨てる、ある種の敬虔さではないか。歴史に対する敬虔さである。言葉の歴史を受け継ぎ、次代へと受け渡そうとする意志が連綿と連なってきたこと、それへの敬虔なる思いであり、それに自分もまた連なろうとする意志が、無心を生むのだろう。そうした無心を核として、和歌は、演技され、生きられていた。およそ浮世離れしたみやびの世界と思われがちな和歌だが、生きることと深く結びついていたと思う。それだけではない、偶然と運命に振り回されながら生きる私たちの生そのものが、実は詩の形をしていたのではなかったか、とすら思わせないではない。さすがに、「吾が仏尊し」であろうか。

「小論文」 国語国文学科

受験番号					
氏名					

問一 空欄

A

 には文中の大江千里の和歌の下二句の現代語訳が入る。解答欄にその現代語訳を記しなさい。

問二 筆者が正岡子規を批判的に取り上げているのはなぜか。その理由を、「演技」という語を用いて説明しなさい。

問三 和歌が古代から近代に至るまで長く生き延びたのはなぜか。筆者の議論を踏まえつつ、あなたの考えを述べなさい。

※問三の解答は解答用紙の裏面に記すこと。

以上

受験番号					
氏名					

「小論文」 国語国文学科

採点欄

問一

問二

※問三の解答は解答用紙の裏面に記すこと。

ここから記入すること ←

問三

ここから左には記入しないこと